

手触り

マンホールの中をのぞき込む
曲がっている線
血が固まっては融ける 繰り返し

あらゆる者が大衆から抜け出し
自由という名札を胸に留め
ああ、再び煽動者を求めている

晴れ間の覗いた灰色の空から
時折落ちてくる滴は、まるで
生物の体内から出る滴りのようだ

凍りつき、そして融解した
ふにゃふにゃの碧い茎を折ると
わずかに粘性を帯びた水が指にまとわりついてくる

切れる寸前の縄がかすかに軋む
無数の黄色い小さな渦巻きが
現われては消える とめどなく

なまあたたかく、同時にひんやりとした唇
感覚器と化した我々の口そのものように
既に放棄された機能を探し出すのは不可能だ

ある固定観念があるとする
それを蹴飛ばしながら歩いて行く者が居るとする
その者はいずれ嘔吐することになるだろう

古びてゆく都市が見える
憐憫という文字を失った者たちが見える
落ちぶれた者は蹴飛ばせばいい・・・

(2008.2.9)